若潮の激流
—漁村の活性化と漁業後継者確保を目指して—

角島漁協若潮会
会員　杉原　博典

１．地域の概要

私達の住む角島は、山口県豊北町の西端にあり、海士ヶ瀬戸を挟んで本土から１．６km沖合に位置し、周囲１６km、面積４．１平方kmの東西に細長く、比較的平坦な島である。（図１）沖合には対馬暖流が流れ、県下屈指の好漁場である汐巻漁場をはじめ、多くの瀬や天然礁が分布し一本釣漁業、敷網漁業等が盛んに行われている。また、沿岸は岩礁域に富みアワビ、サザエ等磯根資源の宝庫となっている。

２．漁業の概要

当組合の概況は、平成８年度実績を見ると、組合員数３２１人、漁船隻数２４０隻、水揚量３，２００トン、水揚高１１億３千万円で、主に敷網、一本釣、磯建網、採介藻等の漁業が営まれている（図２）。

３．グループの組織と運営

若潮会は、島の若者の交流の場および島の活性化に貢献することを目的として、平成元年に会員数８名で発足した。現在の会員数は２８名で、１０代～２０代の若い会員が主体の組織となっている。また、会員の中には漁業者以外の会員も若干含まれている。

４．研究・実践活動課題選定の動機

角島も全国の漁村と同じく、若者の流出等のため島に住む若者が非常に少なくなり、このままでは過疎化、高齢化による地域活力の低下という問題に直面することを危惧した私達は、島の活性化と漁業後継者確保を図るため、次の活動を行うこととした。

（１）島の活性化に関わる活動

「角島恵比寿祭り」は、以前は島の青年団の企画・運営により、島の一大イベントとして催されていたが、青年団が解散したことにより休止状態になっていた。島のみんなの楽しみであり伝統行事でもあったお祭りが無くなったことで、島の活気が低下することや伝統行事が消滅することを危惧した私達は、まず、このお祭りの復活に取り組み、島の活気を取り戻すこととした。

（２）漁業後継者確保に関わる活動

若者の流出による島の過疎化、それによる島の経済の中核を成す漁業の衰退を心配した私達は、どうすれば若者が漁業に就いてくれるのか、また私達が今後漁業を続けるために何が必要なのかを念頭に置いて、次の３つの取り組みを行った。

ア 定期休漁日設定の取り組み

従来、角島では「漁業は時化の日が休み」という慣習が根強く、定期休漁日は設定されていなかった。このことが、若者の漁業への就業の妨げとなっていた。このため「漁業はキツイし休みがない」という若者が抱く漁業の悪いイメージを取り除

き、また家族とのコミュニケーションや彼女とのデートの時間を計画的に持てるよう、定期休漁日の設定に取り組むこととした。

イ 水揚げ安定化の取り組み

近年日本の各海域で見られるように、資源の減少からイサキ、ブリの好不漁の波が激しくなり、安定した水揚げが得られなくなってきた。こうした漁業の不安定さが、漁師になりたい、なってもいいと考えていた島の若者の漁業就業への決心を鈍らせ、ひいては漁業の担い手不足につながっていると考えた私達は、どのような漁業を行えば安定した水揚げを得ることが出来るかを模索した。

ウ 若者と島以外の女性との交流

私達のように離島で生活していると女性と知り合う機会はあまりない。このため、角島も他の島と同様に花嫁の問題は深刻であった。また、島の若者は、女性とのつき合い方が不慣れで、せっかく女性と知り合う機会があっても、上手く生かせないのが実状であった。そこで、私達は島の若者が女性とのつき合いに慣れるため、また、広く外に目を向けてもらうため、「若者と島以外の女性との交流イベント」を持つことが出来ないかと考えた。

５．研究・実践活動状況および効果

（１）島の活性化に関わる活動に取り組んで

「角島恵比寿祭り」を復活させるにあたって、私達は自分たちの幼い頃の記憶を辿ったり、さらには、島のお年寄りにも盛大に行われていた頃の話を聞きながら、みんなで仕事の合間を縫って検討を重ね、準備をした結果、平成２年から完全復活にこぎつけた。また、お祭りの復活は島を離れた人にも口コミで次々に伝わり、懐かしさから多数が駆けつけてくれるようになった。故郷を訪れてはみたいがなかなか機会が無い、という島の出身者のためにもなったと思う。とにかく、私達にとっても初めての活動で、このお祭りを復活できたことにより、島に活気をとりもどしたこと、また、会員の結束がより強いものになり、次の活動への自信にもつながった（写真１）。

（２）漁業後継者確保に関わる活動に取り組んで

ア 定期休漁日設定の取り組み

私達は定期休漁日の設定を組合に提案すると共に、島の色々な会合にも度々出席し、設定を訴え続けた。始めは、年配の漁業者の反発も強く苦労したが、平成２年に毎月第１日曜日を定期休漁日とすることが、組合の総会で決定された。その効果として、家族サービスやデート等が計画的に出来るようになった。また、若者の漁業に対する悪いイメージを変えることが出来たし、漁場を休ませることも出来るようになった。

イ 水揚げ安定化の取り組み

私達は、昭和６０年頃福岡県から角島に導入され、一部の漁業者が行っていた「イカたんぽ流し」に注目した。今まで私達がケンサキイカの漁期ではないと考えていた時期でも釣れるという話を聞いたからである（図３）。そこで、私達は平成２年に従来のこの漁業に、季節の水温に応じてスッテとスッテの間隔を変更する等漁具の工夫・改善を行い、漁場も角島沖合２０～３０マイルまで拡大し１年間試験

操業を行った（図４）。その結果、ケンサキイカが沖合で１年中釣れることがわかった。この取り組みで、「イカたんぽ流し」を軸に、イサキ釣やブリ釣等と組み合わせることにより、１年を通して安定した水揚げを得ることが出来るようになった（図５）。さらに、イカの出荷方法について、鮮度保持と見た目に留意し、従来の木箱から下氷を打ったスチロール箱に切り替える等、出荷方法を改善した結果、従来よりも１～２割高い値で売れるようになった。

ウ 若者と島以外の女性との交流に取り組んで

既に県内の他の島では女性との交流イベントが行われていたので、前例を調べるとともに、女性の募集等を漁協を通じて県や町にお願いして、平成５年にやっと「ラブラブサマーフェスタｉｎ角島」と題したイベントの開催にこぎつけた。これをキッカケに参加した女性とゴールインする会員も出てきた。さらに、イベントを契機に島の若者も女性とのつき合い方が上手になったためか？以後、結婚する者が増えており、島の花嫁不足は解消されつつある（写真２，３）。

６．波及効果

私達のこうした取り組みにより、島が活性化し、漁業が魅力あるものになってきたためか、最近、島の中学生で水産高校に進学する者が増えてきた。さらに、若潮会発足後は毎年のように新規就業者がでるようになった。全国の漁村が後継者不足に悩むなか、角島は大きな財産を得ることになった（図６）。

７．今後の課題

現在建設中の角島大橋が平成１２年に完成予定となっている。平成８年に角島大橋完成後の島の活性化、振興対策について検討する「角島地域漁村活性化ビジョン委員会」が発足した。この委員会には私達若潮会も参加し、角島大橋完成後の密漁対策や販売促進等について、進むべき方向を示しているところである。目指すは目前に迫った２１世紀に飛躍する角島である。そのためにも、様々な角度から課題を見つけ島のためになるような活動を精力的に続ける決意である。若潮の流れはさらに激しく、速くなっていく。

図１　角島漁協位置図

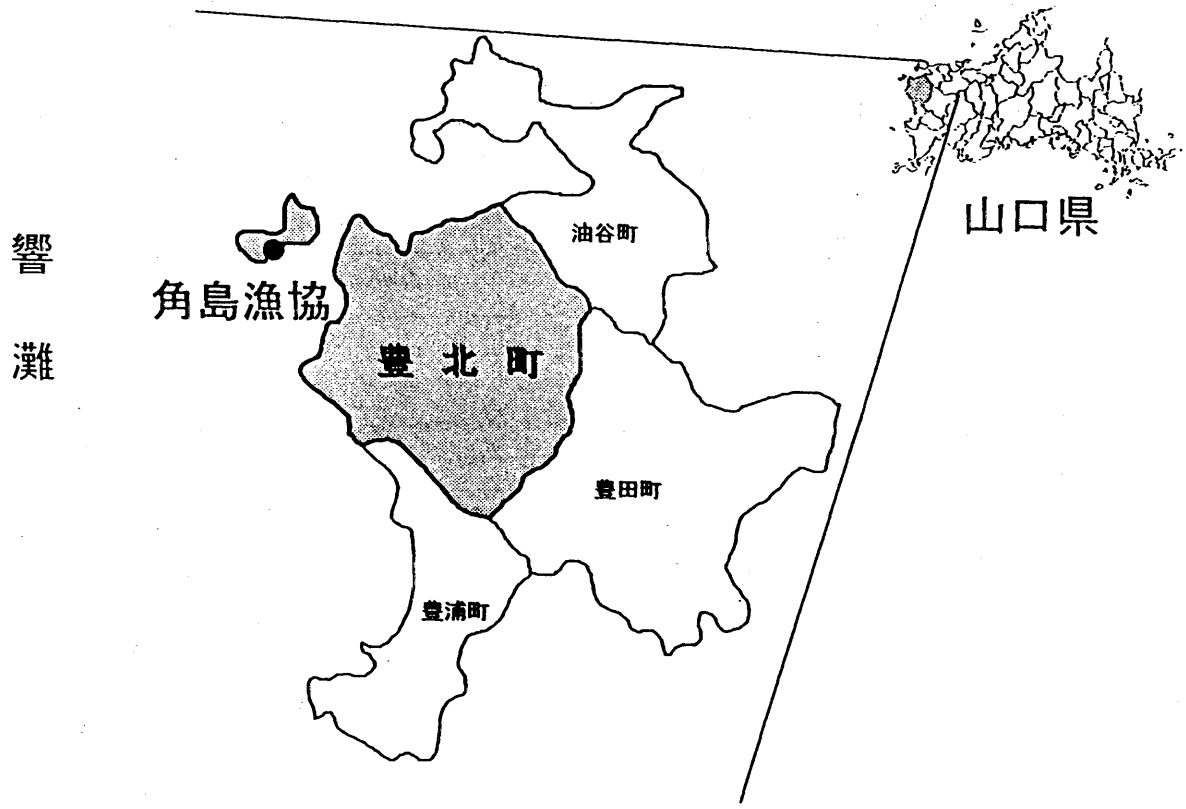


図２　平成８年度漁業種類別水揚

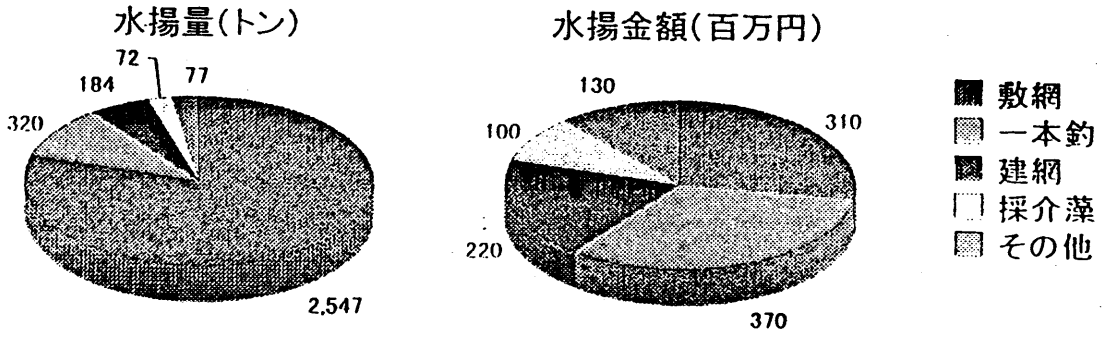
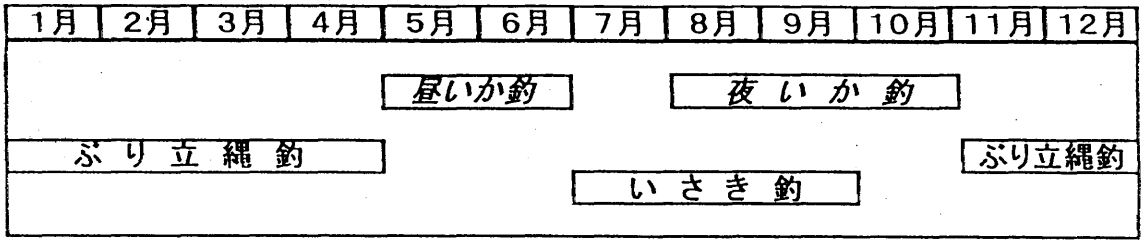


図３　一本釣操業パターン

タンポ流し導入前



タンポ流し導入後

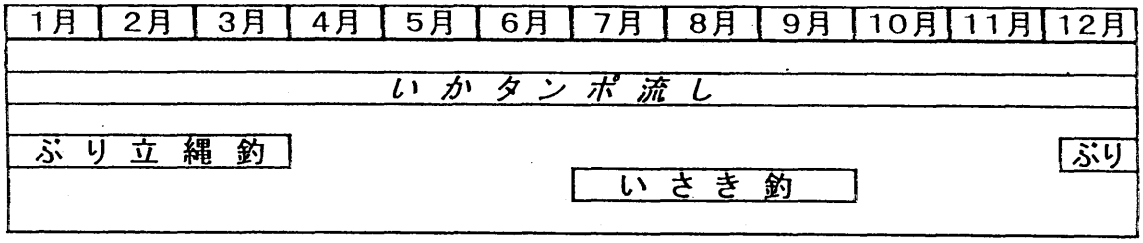


図４　イカたんぽ流し漁具の工夫例

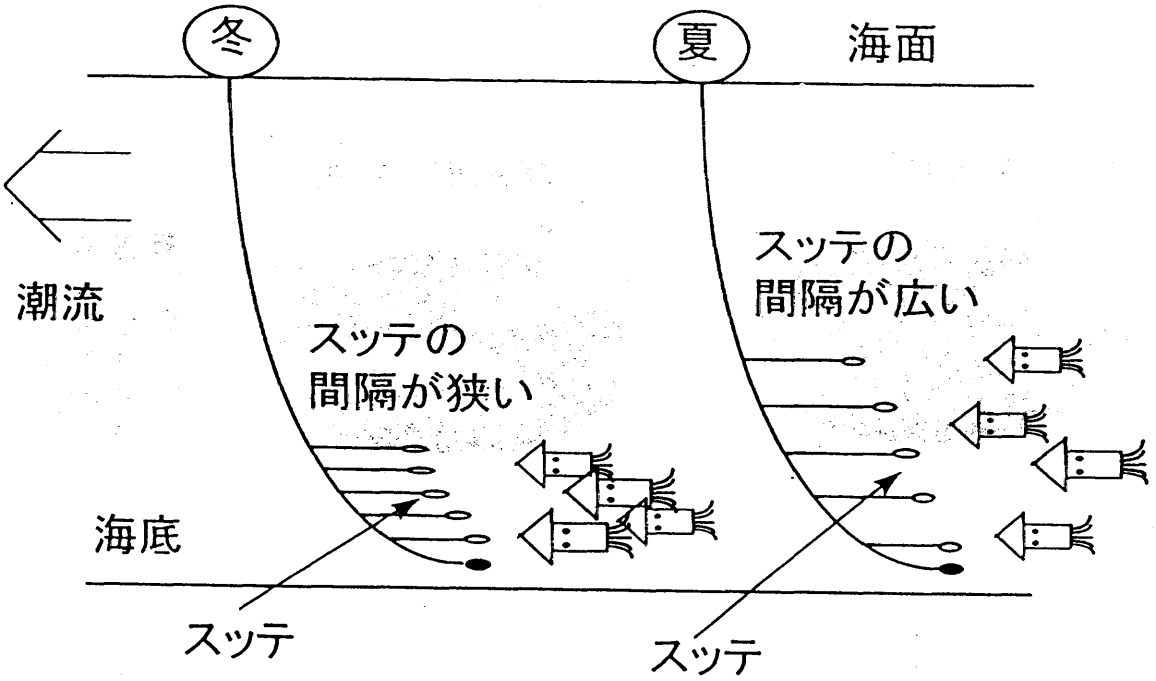


図５　角島漁協一本釣水揚量

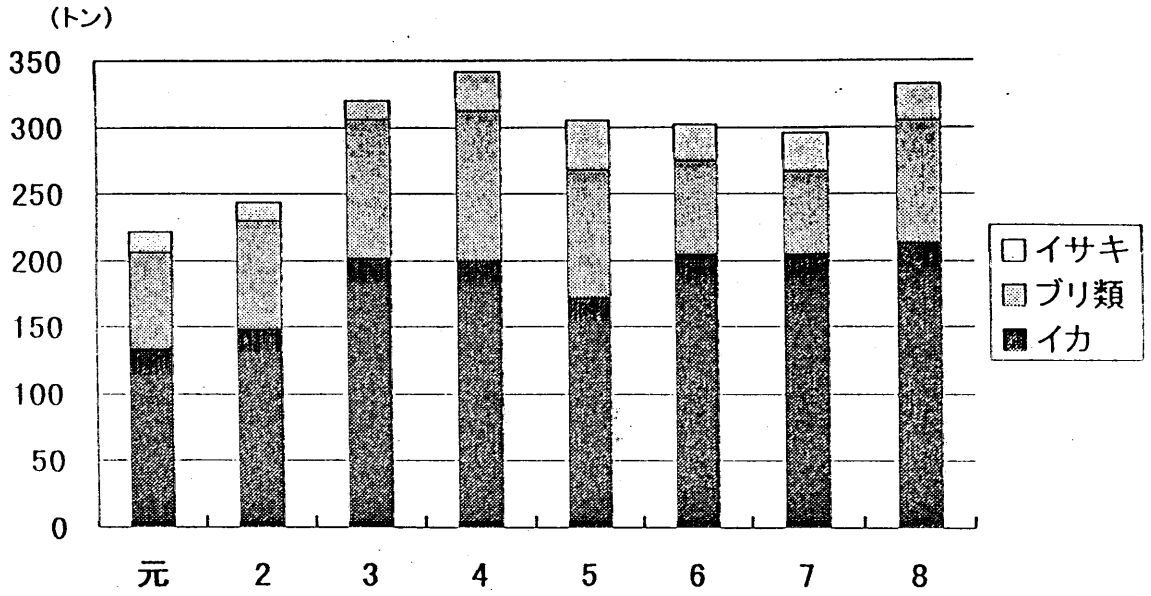


図６　新規就業者の確保

年度	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9
着業者数	1	0	0	0	1	2	2	1	1	1	1	2	2

↑

若潮会発足

島の活性化
魅力ある漁業 → 後継者の確保 → 角島にとって
大きな財産である

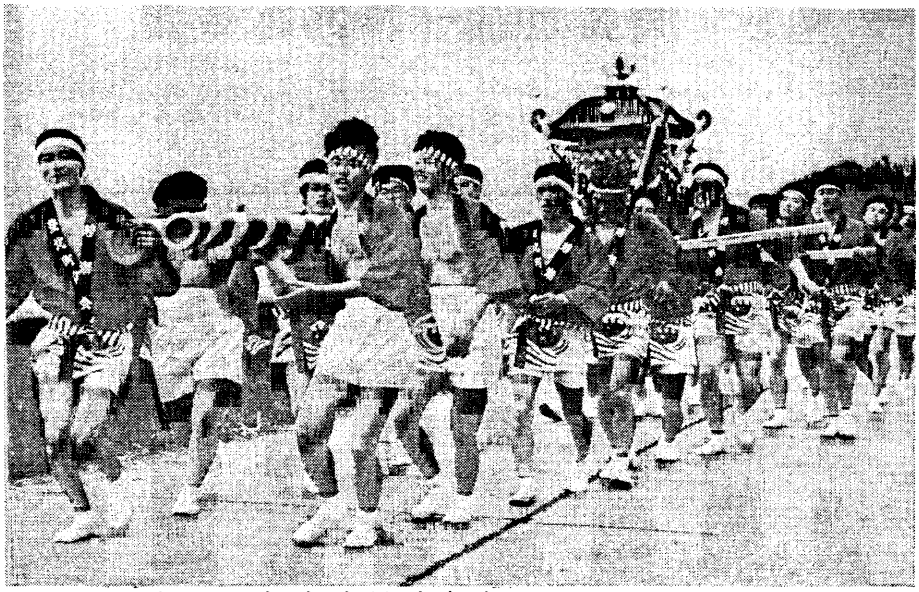


写真１　角島恵比寿祭り（若潮会御神輿）

写真２　ラブラブサマーフェスタｉｎ角島
（角島灯台前で全員記念撮影）

写真３　ラブラブサマーフェスタｉｎ角島
（角島の美しい海で楽しく）